

Title	ワン
Author(s)	ミシュラ, プラタープ ナーラーヤン; 高橋, 明
Citation	印度民俗研究 別巻. 6 p.24-p.28
Issue Date	2020-12-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78713
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ワン

プラタープ・ナーラーヤン・ミシュラ

高橋 明 訳・注

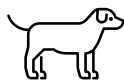


この題を見て我が親愛なる読者諸兄はまずまちがひなく、何というわけのわからないことを言うものかと思つたことであらうし、またもし多少違ふことを考えたとすれば、カールティカ月¹のことでもあり、あたりで野良犬や博打狂いどもがワンワン吠えてうろつきまわっていることから、編集者殿も気がふれたか慌てた余りに、他に何か適当なお題が見つからないもので、この「ワン」すなわち犬の吠え声を表す単語を書きなぐつたのだ。しかしそうではござらぬ。我が読者の皆様にはこの一語でいさか別のことをお伝えしようと思う。大兄、まず鏡を手にとつてごろうじろ。瞼の上になつ黒な変つた形の何やら毛の固まりがおありだろう。印度語を話す我々はそれをワ²ン、すなわち眉、眉毛などと言う。梵語のできる学者殿はそれをブル³ー⁴と言ひ、波斯人はアブル⁵、はたまた英吉利人たちはそれをアイブローとおつしやる。私が申し上げたいのはその眉のことである。たかだかわずかな毛のことではないか、何をわざわざ言うほどのことがあるう、とはおつしやるな。さにあらず。このわずかばかりの毛は、金の糸よりも値打ちがあるのである。ところで私も一家を構える人間です。であるから、もしも家の年寄りか亡くなれば―神様どうかそのようなことがありませぬように―自分の頭の毛、顎鬚、そしてさらに大事な口髭までを剃り落とさねばならない、プラーガ⁶へ参ればきれいさっぱり丸坊主にせねばなるまい、またもし何かの芝居で女形を演じるとなればやはり髭を剃らぬわけにはまいらぬ。世間を捨てて修行の途に就けば、これもやはり髪を降ろさねばならぬ。しかし、たとえこの世が終わろうとも、たとえ百万の聖地を巡ろうとも、たとえこの世の一切の営みが終わリ、また解脱の境地に至ろうとも、決して、決して、この眉の毛一本たりともそれに剃刀を当てることだけはないのである。百の

障り、千の悲嘆、十万の不名誉があろうとも、私はこの自分の顔をどなたにもお見せすることができ、がしかし、もしも何かの故にこの眉毛がきれいさっぱりなくなれば、帷の君よろしく家の奥深く身を潜めるしかない。それは何故か。何故かと言へば、人間の体の中で最も美しいのはその顔であり、さらにまたその顔の中で最も美しいのは眉だからである。人間をお創りになつた神様はこの眉を何と巧みにこしらえたことか。ただただ見惚れるばかりである。「眉の動きの巧みさ、顰めた目、流し目、濡れた目、恥じらいを込めた言葉に微笑み、しやなりしやなりと歩む足、これが女の飾りでもあり、また武器でもある」⁷と詩聖バルトリハリ⁸。殿が詠っている通り、身に覚えのある男であれば誰も深く頷くところである。誰が何と言おうとも、眉こそは女にとつての最高の飾りであり、また色男どもを取りひしぐ武器であることに疑ひはない。このことについて深く思いを致してみるならば、いろいろな感興が湧くであらうし、目に見るならばさまさまな情感も味わえるだろう。しかし、眉の巧みな動きとはそも一体なんであるかともし誰かに聞かれても眉の動きの巧みさ、としか答えようがないのである。眉の動きの細かな違いはと聞かれると誰もが黙きぎるを得ない。残念ながら詩人たちは眉の姿形を詠つただけのことで、本当の所は恋する当の男の心に聞いてみなければわからない。惚れた女の眉がピクリと動くだけで、男の頭上の拔身がぐらりと揺れる。短剣のような眉とはよくぞ言つたものだ。まっすぐに見つめる視線の矢が心臓にぐざりと突き刺さる。この時の眉の弓の働きについてジャヤデーヴァ⁹。殿の的を射たお言葉、「月のかんばせの君、そなたの震える眉こそは、男の正気を奪う黒い雌蛇」¹⁰。機嫌を損ねるとたちまち眉が吊り上がる、そういう恋人を持つ男の目で見ないことにはこれはわからない。数日顔を見ずに

いるだけで会いたい思いに胸を焦がす男にとっては、恋しい女の艶めかしい目つきと表情豊かなその眉は、イードの月¹¹より何千倍も嬉しいものである。かように眉については一人の舌ではとても言い尽くせるものではない。恋心に通じた波斯語詩人のこの歌の一節を聞くならば、恋する男は愁眉を開くことだろう。「眉の姿に込められたわずかな数行の詩句にも数千の微妙な意味がある。さりながら毛の筋一本の違いを読み取るだけの大なる知恵を持たぬ者にはそれがわかるはずもない」¹²と。大いなる賢者のみがわかるとなれば、これ以上何を申すことがあろう。梵語、ブラジ語¹³、波斯語、ウルドゥー語の詩の中でこのわずかな眉毛について語られていないような書物があるだろうか。であれば、これ以上長々と語ることとはやめにして、我が同胞諸氏にかくお願いをして筆を置くことにいたそう。絢爛豪華な見かけの風に揺れる外国人の眉の鳶ばかりをうつとりと眺めることは、もうやめようではないか。自分にとって何が為になり、何が為にならぬかを見極めようでないか。たとえば、印度の富、力、言葉などすべてが無力に見えようとも、我々が互いに眉を曇める悪癖を捨て、事あるごとに互いに眉をしかめあうことをやめ、覚悟を決めて眉を吊り上げて、国の為にとまじりを決し、我々が印度の国産品、我々が宗教、我々が言葉、我々が先祖代々の生業と商売を大切にするならば、神もまた必ずやその努力に報いて下さるであろう。一千万世界の無窮の歩みとも言えども神に備わる眉の働き次第であるからには、印度の哀れな有様をお変えになるのに何の難しいことがあろうか。

第四卷、三号、（八月十五日、ハリシュチャンドラ暦¹⁴三年）



1 インド暦八月。この月の新月にはディワリー¹の祭があり、この間は賭博が公然と許されることを踏まえた記述。

2 原文は ^२हिनदी²語で「眉、眉毛」という意味であるが、同音・同表記で犬の吠え声を表すオノマトペアとしての「ワン」という語が別にある。

3 原文は ^३अ³

4 原文は ^४अ⁴

5 遺灰をガングジス川に流すためにアラール⁵の聖地に行くこと。

6 ミシユラはカーンプルでヒンディー語による演劇活動にも注力し、実際に大事な口髭を剃って舞台で女役を演じたことがある。

7 原文はサンスクリット語。

8 七世紀のサンスクリット語詩人。『百頌集』の作者。

9 十二世紀のサンスクリット語詩人。『ギータ・ゴーヴィンダ』の作者。

10 原文はやや変則的なサンスクリット語。

11 「イードの月」とは「めったに会えない人」の意のヒンディー語のイデオム。

12 原文はベルシア語からのミシユラによるヒンディー語訳。

13 原文は ^{१३}अ¹³ 当時はカーリーボーリーで詩作をするべきか否かをめぐって論争があったが、ミシユラはそのことに反対の立場であった。彼にとつて詩作にふさわしい言語は伝統的なブラジバーシャーであった。

14 敬愛したバラテンドウ・ハリシユチャンドラ (Pratap Chandra, 1850-85) の没年を紀元としてミシユラが始めた暦年。従つて西暦一八八七年に当たる。

解題

著者のプラタープ・ナラーヤン・ミシユラ (Pratap Chandra Mishra) は、一八五六年ウッタルプラデーシュ州に生まれ、後に同州カーンプルに居を定め、一八九四年三十八歳で没するまで、その短い自由奔放な一生を、カーリーボーリー・ヒンディー語散文の確立とインド社会の向上発展のための活動に捧げた。特に、同時代人のバラテンドウ・ハリシユチャンドラ (一八五〇ー八五) からの刺激を受けて、発行者兼編集人として月刊誌『ブラーフマン』 (Brahman) を経済的な困難と闘いつつ約一〇年にわたって発行し続け、そこに発表した自らのエッセイ、論文を通じて、カーリーボーリー・ヒンディー語散文体の確立に貢献した。何よりも彼のヒンディー語は、諺、イデオム、北インドの各種ヒンディー語方言などを自由自在に駆使した実に個性豊かなもので、そこに込められた生来の温かいユーモア、辛辣極まりない諧謔、痛烈な皮肉、そして哄笑と真摯さの入り混じった文体は、現在ではもうどこにも、誰にも見られない貴重なものとなった。当時発足間もない国民会議の活動に賛同していたことから、ミシユラは政治的には穏やかな思潮に与していた。しかし、インドの伝統文化を重んじる彼の主張は、底流としてみれば、現代の保守的思想運動にも脈々とつながるものと考えてよいだろう。

本邦では、彼の諺歌百首 (१०० श्रुति) の古賀勝郎先生による翻訳が「諺歌百首…バラテンドウ・ハリシユチャンドラに捧ぐ」として、印度民俗研究、第七号 (一九七八) に発表されている。彼についての邦語論文としては、「19世紀後半のヒンディー語文学者の言語・宗教・社会観…プラタープ・ナ

ラーヤン・ミシユラについて、高橋明、印度民俗研究、別巻第四号（一九八七）がある。いずれも、OMKA（大阪大学機関リポジトリ）内で閲覧可能となっている。

訳者がミシユラの作品に初めて接したのは、旧大阪外国語大学大学院修士課程における古賀勝郎先生の授業においてであった。それまで目にしていたヒンディー語の現代文学作品には見られない上質のユーモアと作者の自由な精神に惹きつけられ、それ以後、ヒンディー文学に対して訳者が寄せる敬意の最大の拠り所となった。

原題： 𑂔𑂗𑂢𑂰

出典： प्रलय नाटकाणि मिश्र ग्रंथालय, सं. विद्यासागर मन्दिर, नारीप्रवाहिणी सभा, काशी, 1956, pp. 138-140.